

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00779

研究課題名（和文）パーソナルネットワークに着目したグレイ・デジタル・デバイドに関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on the gray digital divide focusing on personal networks

研究代表者

北村 智（Kitamura, Satoshi）

東京経済大学・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40511960

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題に対しておこなった3つの研究から以下のことがわかった。第1に、現在の主要なICT利用であるスマートフォン利用を高齢者が始めるにあたって問題となる障壁・困難・苦勞の解消に対して、子世代の非同居家族からの社会的支援および携帯電話ショップや電話会社等の契約関係にあるサービス提供者からの支援があげられる。第2に、シニア層のソーシャルメディア利用は友人ネットワークサイズの格差拡大につながりうることを示唆される。第3に、子世代からの社会的支援には高齢者の身体的加齢による問題と説明の難しさの問題が存在することがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、国際的に関心の高まっている「グレイ・デジタル・デバイド」、すなわち高齢者層において情報通信技術利用が遅れる問題について、超高齢社会となった日本における実証的研究をおこなったものである。高齢者のソーシャルメディア利用は友人数の格差につながりうること、高齢者のスマートフォン利用に対して子世代の助けが重要となるがそこに困難が伴うことなどがわかった。本研究の成果は、行政サービス、商業サービスのさまざまな面で情報化が進展する社会に対し、高齢者が適応していくための方策を検討するために有用となる。

研究成果の概要（英文）：The three studies conducted on this research topic revealed the following findings. First, social support from children's families who live apart from them and support from service providers with whom they have contractual relationships, such as cell phone stores and phone companies, are needed to resolve barriers, difficulties, and difficulties that older adults face when they start using smartphones. Second, it is suggested that social media use by senior citizens may lead to a widening gap in friend network size. Third, we found that social support from the child generation has problems due to the physical aging of the elderly and the difficulty of explanation.

研究分野：メディア研究、社会心理学

キーワード：超高齢社会 ICT利用 社会的支援 対人ネットワーク 家族・親族 第一次集団 スマートフォン インターネット

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

COVID-19の世界的流行で、身体的距離の確保や遠距離移動の自粛が社会的に要請されている。コミュニティ解放論（Wellman, 1979）で論じられるように、親密な紐帯は地理的に分散して存在するようになった。その基盤は交通手段と通信手段の発展であったが（Rainie & Wellman, 2012）、現在の状況下でICTの活用の重要度はさらに増した。

高齢者のICT利用は若年層に比べて常に遅れていることが明らかになっている。この問題は世界的にも認識されており、「グレイ・デジタル・デバイド（Grey Digital Divide）」と呼ばれている（Huxhold et al., 2020, Millward, 2003）。ICTの活用は、日本政府の掲げるSociety 5.0の実現の要だが、ミクロレベルでは活用できない個人が取り残される懸念がある。COVID-19の流行で求められている感染症対策の中でICTの活用は重要な役割を果たす。COVID-19感染リスクの高い高齢者にとって、より重要な問題であり、Grey Digital Divideは重要な検討課題である。

高齢者のICT利用はパーソナルネットワークの維持に有効である一方で、高齢者のICT利用に対してパーソナルネットワークからの支援が重要であることがわかっている。Chen et al. (2016)によれば、ICTの利用は高齢者の社会的支援および社会的接続性に対して一貫してポジティブな影響を与えるとされる。McWhorter et al. (2020)は高齢者のモバイル技術利用は、友人・家族とのつながりに正の効果をもつことを示している。一方、近年進む北米での高齢者のICT採用の定性的研究では、パーソナルネットワークからの影響の重要性が指摘されている（Delello & McWhorter, 2017, Friemel, 2016, Tsai et al., 2015, Tsai et al., 2017）。高齢者のICT利用は後期多数派ないし遅滞者に着目したアプローチとなり、対人的ネットワークに埋め込まれた個人として高齢者を捉える視点が重要となる。さらに、コロナ禍でパーソナルネットワークへの対面でのアクセスに制約がかかり、Grey Digital Divideはパーソナルネットワークの格差拡大につながっている可能性がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 高齢者のパーソナルネットワークとICT利用の関係について因果推論を行い、高齢者内のGrey Digital Divideを実証的に検討し、(2) Grey Digital Divideの解消方法についての実践的含意を得ることである。この目的(1)を達成するために、研究期間中に予備調査としての定性的面接調査および二波のパネル調査を高齢者対象に実施し、目的(2)を達成するためにパネル調査の分析を活用するだけでなく、高齢者世代および高齢者の子供世代に対する調査を行う。

本研究課題では以下の学術的「問い」に取り組む。

「問い」1 Grey Digital Divideはパーソナルネットワークの格差拡大につながるか？

「問い」2 どのようにGrey Digital Divideは解消しうるか？

## 3. 研究の方法

### 研究1

研究参加者に対し個別インタビュー調査を行なった。インタビューは許可を得て録音し、音声データを書き起こし、書き起こした言語データについて分析を行なった。

調査対象 練馬区シルバー人材センター登録の65歳以上のスマートフォン利用者18名（男性9名、女性9名、年齢67～79歳）および国分寺市シルバー人材センター登録の65歳以上のスマートフォン利用者11名（男性5名、女性6名、年齢67～84歳）を対象とした。

調査時期 練馬区での調査は2020年11月、2021年1月、国分寺市での調査は2021年6月、7月に実施した。

調査内容 半構造化インタビューによって下記の内容を含めて調査を行なった。

- 1) 年齢・性別・これまでの来歴
- 2) 家族構成（同居・非同居）
- 3) スマートフォン利用開始時期
- 4) スマートフォン利用開始のきっかけ
- 5) 他のデジタル機器の利用
- 6) スマートフォンの利用内容
- 7) スマートフォンの使い方の学習方法
- 8) スマートフォン利用における困難とその解消方法
- 9) スマートフォン利用をサポートしてくれる人の存在

### 研究2

調査概要 2022年10月に首都圏・中京圏・近畿圏に居住する55～79歳の男女800名（男性385名、女性415名）に対する訪問留置調査（1波）を実施した（ランダムロケーション・クォータサンプリング）。この回答者に対して2023年10月に2波調査を実施し、665名（男性318

名、女性 347 名) から有効回答を得た (回収率 83.1%)。

分析項目 1 波・2 波調査共通で、14 項目のネット利用内容について、「ほぼ毎日する (5 点)」～「していない (1 点)」の 5 件法で尋ねた。第 1 波データによる因子分析 (最尤法・プロマックス回転) により 3 因子 (F1「サービス・アプリ利用」、F2「ソーシャルメディア利用」、F3「対人コミュニケーション利用」) を抽出した。これにもとづき 1 波、2 波ともに尺度得点を算出して分析に用いた (F1: 1 波  $\alpha = .79$ 、2 波  $\alpha = .78$ 、F2: 1 波  $\alpha = .74$ 、2 波  $\alpha = .75$ 、F3: 1 波  $\alpha = .65$ 、2 波  $\alpha = .60$ )。

ネットワークサイズは「近隣」「友人」「非同居家族・親族」に分けて測定した。「あなたにとって日頃から親しくしている方」の人数を、「近隣」については「ご近所の方」のみ、「友人については「交通手段で 30 分未満」「交通手段で 30 分～2 時間未満」「交通手段で 2 時間以上」の 3 種、「非同居家族・親族」については「親戚の方 (親、子、きょうだいを含む)」を「交通手段で 30 分未満」「交通手段で 30 分～2 時間未満」「交通手段で 2 時間以上」の 3 種で実数を尋ねた。分析では「友人」「非同居家族・親族」はそれぞれ 3 種の人数を合算した値を用いた。

### 研究 3

調査対象 調査対象者は次の 3 つの条件を満たす 35～54 歳の日本在住の男女であった: (1) プライベートで自分専用のスマートフォンを利用している、(2) 父・母 (義理の父・母を含む) のなかにスマートフォンを使っている人がいる、(3) 父・母の少なくとも誰か 1 人にスマートフォンの使い方などについて教えたり、アドバイスをしたりしたことがある。

調査では、クラウドソーシングサービス「ランサーズ」を通じて調査協力者の募集を 2022 年 2 月 21 日から 2 月 24 日にかけておこない、最終的に 518 名 (男性 266 名、女性 252 名) から有効回答を得た。調査協力者の年齢の平均値は 43.93 歳 (SD 5.62) であった。

質問項目 調査では、「あなたの父または母 (配偶者の父・母を含む) のうち、スマートフォンの使い方などについて教えたり、アドバイスをしたりすることの一番多い方を思い浮かべてください。ここからは、その方やその方とのことについてうかがいます。」と教示した上で、思い浮かべた人との関係や年齢、その人について尋ねた。そして、次の 2 つの自由記述回答を求めた。

回答者からみて想起した人の関係は「父親」が 120 名 (23.17%)、「母親」が 375 名 (72.39%)、「配偶者の父親」が 9 名 (1.74%)、「配偶者の母親」が 14 名 (2.70%) であった。想起した人の平均年齢は 71.44 歳 (SD=6.11) で、最高年齢は 88 歳、最低年齢は 54 歳であった。また、回答者と同居あるいは同じ建物に居住している人は 229 名 (44.21%)、回答者の自宅から 1 時間程度以内で行ける場所に住んでいる人は 159 名 (30.69%)、回答者の自宅から 1 時間以上かかる場所に住んでいる人は 130 名 (25.10%) であった。

本研究で分析する自由記述回答の質問項目の 1 つめは次のとおりであった (教える・アドバイスする内容): 「その方に対して、スマートフォンの使い方などについて教えたり、アドバイスしたりしたこととして、具体的にはどのようなことがありましたか。覚えていらっしゃる範囲で結構ですので、できるだけ詳しく記入してください。」この質問項目の次に、2 つめの自由記述回答の質問を次のようにおこなった (教える・アドバイスする際の苦労): 「その方に対して、スマートフォンの使い方などについて教えたり、アドバイスしたりしたときに苦労されたことにはどのようなことがありましたか。些細なことでも結構ですので、できるだけ詳しく記入してください。」本研究ではこの 2 つの質問項目に対してえられた自由記述回答データを KH Coder (樋口, 2020) を用いて分析した。なお、KH Coder での形態素解析には MeCab を利用した。

## 4. 研究成果

### 研究 1

半構造化インタビューの文字起こし記録から切片化をおこない、カテゴリ生成をした上で、カテゴリ・グループにまとめた。また、各カテゴリのなかで未解決と解決の分類をおこなった。分類結果については表 1 に示した。

高齢者のスマートフォン利用に際しての障壁・困難・苦労として単一のカテゴリが該当したカテゴリ・グループには「わからないことへの不安」と「具体的出来事に対する恐怖」があった。複数のカテゴリが該当したカテゴリ・グループには「具体的に発生したトラブル」と「新しい取り組み」の 2 つがあった。「具体的に発生したトラブル」には「アプリ操作の問題」「ネットワークの問題」「契約の問題」「言葉の問題」「OS・設定の問題」「ハードウェアの問題」「迷惑メールなどの問題」があった。一方、「新しい取り組み」には「アプリ操作の障壁」「OS・設定の障壁」「ハードウェアの障壁」「ネットワークの障壁」「契約の障壁」があった。

海外の先行研究と合致するように、問題の解決には他者からの社会的支援が有効であることが示された。特に、障壁・困難・苦労の解決にあたってえられていた社会的支援源として、子世代の非同居家族が相対的に多くあげられた。現在の日本社会において、高齢者の子世代は独立していることが多く、高齢者の同居家族もまた高齢者であることが多いため、非同居家族からの社会的支援の重要性が示唆された。

また、携帯電話ショップや電話会社等の契約関係にあるサービス提供者からの支援の重要性も示唆された。家族からの社会的支援が利用できない際に、専門性の高いサービス提供者は契約関係にあることからアクセスしやすい支援源となっていることがうかがえる。

表 1 高齢者のスマートフォン利用に際しての障壁・困難・苦勞と社会的支援源の分類

カテゴリ・グループ	カテゴリ	具体的内容			社会的支援あり					支援なし
					家族 (同居)	家族 (非同居)	友人 ・知人	サービス 提供者	その他	
わからないことへの不安	わからないことへの不安	LINEのチラシが来る; スタンプの請求書がわからなかった; パスワードの管理; セキュリティが不安; 同意するかどうかの表示; 入れても無料なアプリかどうか; 落としたり怖い (不正使用); 脳トレのゲームが無料かどうか; カタカナ語が多い	未解決	5ケース	0	0	0	0	0	5
			解決	4ケース	0	3	0	0	0	1
具体的出来事に対する恐怖	具体的出来事に対する恐怖	詐欺まがいのメール; 登録していない番号から電話がある; フィッシング詐欺; 写真を加工するアプリを入れたら詐欺だった; 詐欺メール; 詐欺まがいの広告; 検索していたら変なサイトが出てきた; ウィルスに感染しているという迷惑メール	未解決	0ケース						
			解決	8ケース	0	4	0	2	1	2
具体的に発生したトラブル	アプリ操作の問題	圧縮された動画が聞かない; zoomで音がつながらない; 地図アプリがわからない; QRコード読み取り; LINEがつながらなくなった; paypayの限度額増額; やっているゲームで不具合; やっているゲームで不具合; Facebook; メール送信	未解決	5ケース	0	1	0	0	0	4
			解決	5ケース	0	1	1	3	0	0
	ネットワークの問題	ネットが低速になる; Wi-Fiを入れたら良いということ; 通信量が高い (Wi-Fiにつながらない); ギガが減っていく; スピードが遅くなる	未解決	1ケース	0	0	0	0	0	1
			解決	4ケース	0	2	0	1	0	1
	契約の問題	明細が高い; 電話料金 (J:COMとau)	未解決	0ケース						
			解決	2ケース	0	1	0	1	0	0
	言葉の問題	用語が理解できない	未解決	1ケース	0	0	0	0	0	1
			解決	1ケース	0	0	0	1	0	0
	OS・設定の問題	やったつもりがない設定になってしまった; 充電マークが何かわからなかった; 半角入力; バージョンアップ; 文字入力; d払が消えてしまう; アップデート; 許可しますとか文字が出てくる; 大文字と小文字が切り替わらない; フリーズした; 操作を間違えて変にした; 液	未解決	3ケース	0	0	0	0	0	3
			解決	10ケース	2	2	0	6	0	1
	ハードウェアの問題	電池の不具合; SIMカードがつかまらない; ストレージがいっぱいになった; 電池残量; 液晶が傷ついたように感じた; 大きい	未解決	3ケース	0	0	0	0	0	3
			解決	3ケース	0	0	0	3	0	0
迷惑メールなどの問題	ジャンクメールが来る; 迷惑メールがくる	未解決	0ケース							
		解決	2ケース	0	1	0	1	0	0	
新しい取り組み	アプリ操作の障壁	LINEの使い方; 銀行口座アプリ; LINEの通話機能; ポケモンGOのことがわからない; 写真の加工 (イラストレーター); LINEアプリのこと; LINEの始め方; マイナポイント; メールを送受信; 電話のかけ方; ポイントのつけ方; 電話メールの使い方; 最初に入っているアプリについて協力者14; カメラでQRコードを読み込む; メルカリの使い方; COCOAの入れ方; 写真が送れない; 新しいアプリを入れる; スクリーンキャプチャ; 文章を作るとき裏技; Wechatを入れる	未解決	3ケース	0	0	0	2	0	1
			解決	18ケース	0	6	1	9	3	0
	OS・設定の障壁	ドコモのアプリ以外の入れ方がわからない; 着信音の入れ方; お財布携帯; フリック入力	未解決	1ケース	0	0	0	0	0	1
			解決	3ケース	3	0	0	0	0	0
	ハードウェアの障壁	電源の入れ方; iPodとスマホの同期	未解決	1ケース	0	1	0	0	0	0
			解決	1ケース	0	0	1	0	0	0
	ネットワークの障壁	インターネットの設定; Wi-Fiのつなぎ方	未解決	0ケース						
解決			2ケース	0	1	0	0	0	1	
契約の障壁	スマホの機種切り替え; スマホの購入; スマホへの切り替え; 機種を選ぶとき; 機種を選ぶ	未解決	0ケース							
		解決	5ケース	1	1	0	2	0	1	

研究 2

ネット利用内容の3因子 ( F1「サービス・アプリ利用」、F2「ソーシャルメディア利用」、F3「対人コミュニケーション利用」) の1波・2波のそれぞれの得点および、3種のネットワークサイズ (近隣ネットサイズ、友人ネットサイズ、非同居家族・親族ネットサイズ) の1波・2波のそれぞれの大きさについて比較し、対応のないt検定をおこなった。分析結果を表2に示した。比較の結果、ネット利用内容の3因子の利用度合いは1波・2波の間で平均的には差はみられなかった。一方、ネットワークサイズについては3種とも1波に比べて2波のほうが有意に大きくなっていった。

表 2 ネット利用内容とネットワークサイズの1波・2波比較

n=665	22年 (1波)		23年 (2波)		t	p	
	Mean	SD	Mean	SD			
F1	アプリ・サービス利用	2.20	0.86	2.22	0.84	1.34	0.180
F2	ソーシャルメディア利用	1.61	0.89	1.61	0.89	0.16	0.872
F3	対人コミュニケーション利用	3.21	1.10	3.19	1.06	0.42	0.676
	近隣ネットサイズ	4.49	5.77	4.99	5.64	2.51	0.012
	友人ネットサイズ	7.81	11.16	8.62	10.86	2.07	0.039
	非同居家族・親族ネットサイズ	10.38	10.69	11.27	11.62	2.02	0.044

ネット利用に対するネットワークサイズの影響を検討するために、2波のネット利用内容の各得点を目的変数とし、1波のネット利用内容の各得点を統制変数にした上で、1波の各ネットワークサイズを説明変数とした重回帰分析をおこなった。統制変数として分析には女性ダミー、年齢、被教育年数を加えた。分析結果を表3に示した。分析の結果、いずれのネット利用内容 (2波) に対しても、3種のネットワークサイズ (1波) はいずれも有意な効果がみられなかった。

また、ネットワークサイズに対するネット利用の影響を検討するために、2波の3種のネットワークサイズのそれぞれを目的変数とし、1波の該当するネットワークサイズを統制変数にした上で、1波の各ネット利用内容得点を説明変数とした重回帰分析をおこなった。この分析でも統制変数として女性ダミー、年齢、被教育年数を加えた。この分析結果は表4に示した。分析の結果、友人ネットワークサイズ (2波) に対するソーシャルメディア利用得点 (1波) の有意な正の効果が認められた。近隣ネットワークサイズ、(非同居) 家族・親族ネットワークサイズに対してはいずれのネット利用内容も有意な効果は認められなかった。また、友人ネットワークサイズに対しても、ソーシャルメディア利用以外のアプリ・サービス利用および対人コミュニケーション利用には有意な効果は認められなかった。

表 4 ネット利用内容に関する重回帰分析の結果

目的変数	F1 (2波)		F2 (2波)		F3 (3波)	
	<i>b</i>		<i>b</i>		<i>b</i>	
F1(1波): アプリ・サービス利用	0.69	***				
F2(1波): ソーシャルメディア利用			0.73	***		
F3(1波): 対人コミュニケーション利用					0.60	***
女性ダミー	-0.02		-0.02		0.15	*
年齢	-0.02	***	-0.01	***	-0.02	***
被教育年数	0.04	***	0.03	***	0.06	***
ネットワークサイズ(1波)						
近隣	0.00		0.01		0.00	
友人	0.00		0.00		0.00	
家族・親族	0.00		0.00		0.00	
定数	1.50	***	0.64	*	1.89	***
<i>F</i>	220.17	***	145.38	***	104.86	***
<i>R</i> -squared	0.70		0.61		0.53	
Adj <i>R</i> -squared	0.70		0.60		0.52	
* <i>p</i> <.05, ** <i>p</i> <.01, *** <i>p</i> <.001						

表 3 ネットワークサイズに関する重回帰分析の結果

目的変数	近隣		友人		家族・親族
	<i>b</i>		<i>b</i>		<i>b</i>
ネットワークサイズ (1波)					
近隣	0.56	***			
友人			0.54	***	
家族・親族					0.52
女性ダミー	0.57		-0.12		-1.24
年齢	0.07	*	0.07		0.12
被教育年数	0.01		0.35		0.37
ネット利用(F1)					
アプリ・サービス利用	0.00		0.50		-0.09
ソーシャルメディア利用	-0.26		1.21	*	0.77
対人コミュニケーション利用	0.30		0.14		0.31
定数	-3.50		-8.84		-8.40
<i>F</i>	54.21	***	54	***	31.56
<i>R</i> -squared	0.37		0.37		0.25
Adj <i>R</i> -squared	0.36		0.36		0.24
* <i>p</i> <.05, ** <i>p</i> <.01, *** <i>p</i> <.001					

### 研究 3

「教える・アドバイスする内容」および「教える・アドバイスする際の苦勞」のそれぞれについて、自由記述回答データを対象として形態素解析をおこない、抽出語の共起ネットワークの作成をおこなった。作成された共起ネットワークをもとに、サブグラフの抽出をおこなった。それぞれで抽出されたサブグラフに含まれた抽出語とそれらの語の含まれる具体的記述をもとに、各サブグラフの解釈をおこなった。

まず、「教える・アドバイスする内容」については 13 つのサブグラフが抽出された。そして、具体的記述内容をもとに検討した結果、「教える・アドバイスする内容」には「スマートフォンの基本操作・基本設定」、「Google・YouTube の使い方」、「メッセージ機能の使い方」、「スタンプの購入」、「スマートフォン購入後の説明」、「その場で見て教える」、「アップデート表示への対処」、「SNS の使い方のアドバイス」、「電源の入れ方・再起動の仕方」、「文字入力の仕方」、「通知の消し方」、「ビデオ通話の仕方」、「機種変更のやり方」、「(スマートフォンまたは LINE への) 友達追加のやり方」という 14 つのトピックが含まれていると考えられた。

また、「教える・アドバイスする際の苦勞」については 8 つのサブグラフが抽出された。そして具体的記述内容をもとに検討した結果、「教える・アドバイスする際の苦勞」には、「慣れ・覚えの進まないこと」、「基本的用語の通じなさ」、「非対面状況での説明の難しさ」、「専門用語の説明の難しさ」、「機種の違いによる説明の難しさ」、「LINE 通話の理解に関する苦勞」、「タッチパネル操作の難しさ」、「スマートフォンでの文字入力の難しさ」、「老眼による視力の問題」という 9 つのトピックが含まれていると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 北村智	4. 巻 59
2. 論文標題 スマートフォン利用に関するシニア世代への社会的支援の内容と苦勞についての基礎的検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 コミュニケーション科学	6. 最初と最後の頁 201-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 北村智
2. 発表標題 高齢者の情報通信技術利用に対するソーシャルサポートの有効性
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北村 智, 森 玲奈
2. 発表標題 高齢者のスマートフォン利用における困難と支援獲得：都市部在住高齢者に対するインタビュー調査をもとに
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北村 智, 片桐恵子, 森 玲奈
2. 発表標題 中高年・シニア世代のインターネット利用と社会的支援の関係
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北村智	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 21
3. 書名 「中・高年齢層の対人環境とICT利用に関する社会的支援」橋元良明(編) 『日本人の情報行動2020』(pp.255-275)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 玲奈 (Mori Reina) (70588087)	帝京大学・公立大学の部局等・准教授  (32643)	
研究分担者	片桐 恵子 (Katagiri Keiko) (80591742)	神戸大学・人間発達環境学研究所・教授  (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------